

## 批評と紹介

昌彼得・王徳毅・程元敏・侯俊徳編

## 宋人伝記資料索引

渡辺 紘 良

商務印書館発行の『中国人名大辞典』（初版、一九二一年）は伝記資料を正史列伝から私人の撰述せる書、金石文等に至るものまで求めているから、今日といえども利用価値は少くない。これによって人物の王朝・名字・郷貫・事蹟等の略伝を知ることができる。ただこの書には典拠が示されていないから、更に調べたい人物がいてもそのつてがない。宋代人物についていえばその役目を果してきたのが哈仏燕京学社引得シリーズの一冊『四十七種宋代伝記綜合引得』（一九三九年、燕京大学図書館、二版は一九五九年、東洋文庫）である。この書は宋史・東都事略・南宋書等の列伝、琬琰集・宋史翼等の伝記集、宋大臣年表等の年表類、紹興十八年同年小録等の登科録、それに宋人軼事彙編等四十七種の書に載る伝記の索引であって、宋代官僚をはじめ主な人物はこれによって更に詳しい事蹟を調べることができる。しかしこの書が引く資料は全て編纂物であるから『中国人名大辞典』所載人物の略伝

の根拠はこれによってつくされたわけではない。そこで編纂物以外に載る伝記資料、特に文集所載墓誌等の索引としてつくられたのが宋史提要編纂協力委員会編『宋人伝記索引』（一九六八年、東洋文庫）であった。もっとも墓誌銘等の索引としては既に中華書局一九三七年刊『歷代名人年里碑伝綜表』（一九五九年補訂、書名を『歷代人物年里碑伝綜表』と改む）があり、宋代人物も多数あげられてはいるが、墓誌の類全てを網羅したものではなかった。その点『宋人伝記索引』は宋人及び遼・金支配下の漢人の伝記について、五代・宋代・金代の文集・総集類三百余、金石文・方志それに永樂大典・宋文鑑・赤城集・遼文存等の書から名字・籍貫・生卒年に加えて父祖三代の名をあげ、典拠となる資料については神道碑・墓誌銘・墓表・墓碣・行状・埋銘・塔銘・伝・年譜・哀詞・家伝・家譜等の題名をあげ、その所在を示している。慈溪黃氏日抄分類等の文集以外の書及び元人文集に載る宋人伝記資料にもあたってほしかったという希望はあるが、この書によって我々はほど宋代人物の伝記資料を検出しようこととなり不断我々に多大の便宜を与えてくれているのである。こうして『四十七種宋代伝記綜合引得』と『宋人伝記索引』とによって伝記資料の所在が確認された以上、それらを基礎に『中国人名大辞典』の宋人について増訂されたものができてもおかしくはない。かかる期待にこたえてくれたのが本書で

ある。本書企画者である昌彼得氏は既にほど同じねらいをもった一九六五年刊『明人伝記資料索引』に主任として参画されており、また王徳毅氏も同じくその編纂に携ったと聞くし、同氏はまた李燾父子年譜（台北、中国學術著作奨助委員会出版、一九六三年）、洪邁年譜（幼獅学報三ノ二、一九六一）、宋史研究集第二集所収、一九六五年）、范成大年譜（台大文史哲学报一八、一九六九年、宋史研究論集二所収、一九七二年）等を作成せられておる。かように宋人の伝記資料に並々ならぬ情熱と探索の経験をもつ諸氏によって編纂された本書は宋人の伝記とその資料索引の集大成と称しても過言ではないだろう。すなわち宋人のみならず元人の文集にもあたって『宋人伝記索引』の欠を補い、文集以外の伝記に関する編纂物にもあたって『四十七種宋代伝記綜合引得』の全てを吸収し、宋元学案、同補遺にもあたり、また生卒年・字号・籍貫・親屬・科第・仕履・事功・封贈・特長・著作等をあげて略伝を撰し人名辞典としての役割を果している。特に注意せられるのは『明人伝記資料索引』では往々に省かれたという零細な伝記資料とその人物を悉く収載し、資料としては『宋人伝記索引』所引の外、往々見過ごされがちな序文類、題跋、祭文それに内制・外制をも採用していること、人物の父祖三代は記さずともその親族関係に注意をはらい、父子・夫婦・兄弟の間柄を努めて指摘せんとしていること等であらう。こうした

作業によって明らかにされた人物の名字・姻戚関係は少なからずである。今後本書は我々の座右におかれ人物伝とその根拠をさぐる上で第一に利用せられることにならうと思う。では『四十七種宋代伝記綜合引得』と『宋人伝記索引』とはもはや利用価値をなくしたかといえ、本書はそれ程の完璧さを誇るまでにいたっていない点もありそうに思う。『宋人伝記索引』本文二頁には三人の丁姓人物が名の不明のまま記載されているが、そのうちの一人は本書第一冊、一三頁に丁宝臣の兄丁宗臣なる者であって、官は屯田員外郎に至ったと記載されている。ところが臨川集によれば丁宝臣の曾祖は輝、祖は諒、父は東之とあり、歐陽文忠公集には全て某（『宋人伝記索引』には記載なし）とあるに對し、文恭集によれば丁宗臣の曾祖は隱景、祖は衡泌、父は諱某（同じく記載なし）とあって、祖父三代の記載が一致しないこと、また丁宗臣の最終階官は「尚書都官員外郎丁公墓誌銘（文恭集）」なる題名によって屯田員外郎ではなく都官員外郎であったこと、等が『宋人伝記索引』によって知ることができるのである。つまり本書は諸資料を涉獵して各人物間の親戚関係を明らかにした功を特筆できるのではあるが、父祖三代の名をあげて更にそれを確かめるということはなされてない。また墓誌銘等の題名をこの場合も「丁公墓誌銘」とあるように一般に官職を省略したまゝ挙げられている。これは両制をフルネームで

挙げている為の措置とも考えられるが、全ての官職について兩制が残されているわけではない。これでは丁宗臣の場合のように、略伝中の最終官と墓誌題名との間に喰違いがあったとしても往々に見落されてしまう恐れがある。兩制等もあげて官蹟を跡づけんとした努力に加えて面倒ながら墓誌等も正確な題名を載せてはしなかった。丁宗臣の「尚書都官員外郎」なる最終官は贈官かもしれないので、文恭集にあたってみると「……遷秘書丞、三司奉知舒州太湖県兼榷茶禁……考課遷太常寺博士、汎恩除尚書屯田員外郎、在官五年代遷進秩中都通判定州、暴中風眩以至含壁……」とある。中都は中都官、この場合都官員外郎を指すのであろう。太常博士↓屯田員外郎↓都官員外郎のコースは常調（通常の昇進ルート）なのである（宋史一五八選筆志四銓法、遷秩之制）。丁宗臣の略伝中に通判定州をあげる以上はやはり「官至都官員外郎」となすべきである。こうみてくると『宋人伝記索引』が墓誌銘等の題名を省略せず採録してあるのは捨てがたいのである。残る名の不明な丁姓のうち一人は本書第一冊、一四頁で丁昌期の祖父なることが明らかにされているが、もう一人の江湖長翁集所載の丁君墓誌銘については本書の丁姓の個所には記載がないようである。名字の不明なものについて『宋人伝記索引』は不明なまゝ挙げてはいるが、本書はそれをどう扱っているのか必ずしも明らかでない。字の判る者についてはそれを見出

しとしている例を見出すが、これが一般的なのか否かも不明である。しかし以上は強いて捜し求めた欠点であって、本書が伝記資料の集大成として持つ値打をいささかもそこなうものではない。本書は単に索引として利用せられるだけでなく、常時、それぞれの立場から利用せられて新たな問題を提起しうることも可能なように思える。なぜなら通り一遍の官蹟或は事蹟の記載、繰り返される常套語も、それが積み重ねられてみると相当の重みをもってくるように感ぜられるからである。ともかく本書は宋代史研究のために利用度の高い文献となることであろう。（全六冊附字号索引、鼎文書局、民国六十三年〜六十五年）

L・C・グドリッチ、房兆楹編

### 明代名人伝 一三六八—一六四四（上・下）

山根 幸夫

今般、コロンビア大学プレスから、L・C・グドリッチ教授主編、房兆楹氏協編で Dictionary of Ming Biography 一三六八—一六四四（明代名人伝）が刊行されたことは、さき一九四三—四四年に出版された Eminent Chinese of the Ch'ing Period 一六四四—一九一二（清代名人伝略）に次ぐ快挙といふべきであろう。本書の出現によって、我々はおも